

カリフォルニア・プロテスタントの 教派協調運動と日本人合同教会の設立

—長老、会衆両派の場合—

吉 田 亮

はじめに

一九一四年一〇月四日、桑港日本人基督教会が設立された。該教会の設立は在米日本人キリスト教史において一つの点で意義がある。まず該教会の設立はアメリカ・プロテスタント二教派（長老、会衆）が在米日本人伝道という共通目的のために協力、合同したこと、次に日本人クリスチヤンが長きにわたって教派にとらわれずに寛容してきました「無教派」、「教派協調」的運動の一成果としてである。

該教会の設立に関わる問題は、日本人クリスチヤンが各教派に属しつつも一致合意していくかどうかという問題もあることながら、果たしてアメリカ・プロテスタント教派が各々の教派的利害にとらわれずに日本人伝道という一つの目的のために一致合意できるのかどうかという、アメリカ・プロテスタントの教派主義の歴史に関わる大きな問題である。

本稿は桑港日本人基督教會設立に關わるこの問題の全体像を明らかにすることを目的としていない。むしろ該教会設立に大きな影響を及ぼしたカリフォルニア・プロテスタント——特に長老、会衆派——の教派協調、合同運動にのみ焦点をあてて考えてみたい。尚、該教会設立に關わる日本人クリスチヤン及びアメリカ人（例、W・ボンド、E・ストウジ）の動きは別稿で論じたい。

本稿の考察によつて、カリフォルニアの長老、会衆両派が在米東洋人伝道においてどのように教派協調を推進していか、それらが日本人伝道のための教派協調、合同を支える基礎としていかに究極的に日本人合同教会設立に寄与したかが明らかになろう。

主に取り扱う年代は一九一〇年代前半である。この時期には在米日本人はサンフランシスコ、ロサンゼルスなどの大都市だけでなく、カリフォルニアに広範囲に分散し、商業、農業、漁業その他の領域でその存在を知られるようになつていて。同時に特に日本人の農業への進展が著しいことから、一九一三年に排日土地法が制定されるなど、日本人労働者への排斥運動が高まっていた。日本人クリスチャンは広範な地域に分散した日本人及びその社会がもつ諸問題に対応すべく、様々な「無教派」、「教派協調」的組織（加州基督教徒同盟会「一九一〇」、矯風会「一九一一」、基督教徒同盟伝道団「一九一一」、基督教伝道団「一九一一」、南加基督教同盟会「一九〇六」、基督教伝道団「一九一三」等）をつくって各地域を巡回し、日本人の教化啓蒙矯風に尽力していた。⁽¹⁾

こうした時期にカリフォルニアの長老、会衆両派がどのような姿勢で日本人伝道にのぞんだのかを見ていくために、まずアメリカ・プロテスタントの教派協調、合同の全體的な流れをみた後、いかにカリフォルニアの長老、会衆両派がそうした流れの影響を受けて東洋人伝道において教派協調を推進しようとしたか。次に、こうした二派の東洋人伝道に対する姿勢が教派協調による日本人伝道にいかに影響を及ぼし、サンフランシスコの日本人合同教会設立につ

て有利な状況をつくりていったかについてみていただきたい。

—長老派、会衆派の東洋人伝道

長老、会衆両派の教派協力は一八〇一年に両派が“Plan of Union”⁽²⁾と呼ばれる協定を結ぶことによって具体化する。この協定は両者が新伝道地を開拓する場合に競合せずに共同の教区をつくり、牧師は両者のへやひやひかの呼んでもよいといふものであった。しかし一八三七年に長老派が厳格なカルビニズムを主張する“Old School”により柔軟な“New School”に分裂したために、協定は従来通りに実行できなくなつた。すなわち長老派の側では“Old School”からの協定は長老主義的でないとして彼ら自身の伝道機關のみを支援するところになつた。一方会衆派の側でも、この協定がより組織的に密な教派的構造をもつ長老派にとって有利であることから不満の声がでてゐた。結局この協定は一八五一年に解消される。

外国伝道では、当初はアメリカン・ボード(American Board of Commissioners for Foreign Missions)にみられるように長老派と会衆派は協力関係をもつてゐた。すなわち一八一一年の長老派総会はアメリカン・ボードを支援するところを各教会に推薦し、一時は長老派のメンバーがボードの大多数を占めていた。しかし上記の長老派の分裂によじて“Old School”は彼の自身の伝道局を支援するようになつた。一八七〇年頃には、アメリカン・ボードは教派協力的組織という特性を失つてしまふ。

その後、長老、会衆両派による教派協力関係はその他の諸教派をも含んだ教派協調組織の展開と、う脈らぐの中で行われる。

一八六七年の福音同盟会 (Evangelical Alliance) のアメリカ支部の設立、米国基督新教連合協議会 (Federal Council of the Churches of Christ in America, 1908)、国外伝道協議会 (Home Mission Council, 1908)、米国国外伝道会議 (Foreign Mission Conference of North America, 1909) 等のプロテスタントの教派協調組織が、プロテスタント教派の国内外の伝道における教派協調に向けた歩みを長年回顧し、やがてしたる程の一端を擧げた長老、余衆両派の教派協調運動の歴史を示しておる。されば。

一九一〇年六月、オシハバトヤ開催された第一回の世界宣教会議 (International Missionary Conference) は、アメリカの教派協調運動の歩みに大きな影響を及ぼした。例えば從来毎年集まつて種々の問題について協議する機会をもつたなかつた北美国外伝道会議は、オシハバトヤ会議以降その組織の憲法を制定し、改めて密に外国伝道に亘る協議、奉仕する機關となつた。

カリヲオルローの長老、余衆両派ならずだトメリカ・プロテスタントの教派協調の流れの中にも、カリヲオルローの東洋人伝道に取り組んでゐるやうだ。両派の機關誌である *The Pacific* (郵便)、*Pacific Presbyterian* (郵便) だむおひら上ひたり、シカド二派が教派協調、合同に於いて積極的じゆげいたがるが回れる。紙数の制限上内容の検証めどりあんが、代表的なものを擧げる次の如きである。

“Christian Unity” (*The Pacific*, February 8, 1911), “International Federated Evangelism” (*The Pacific*, February 15, 1911), “Resolutions Passed at Pacific Coast Congress Relating to the Work among the Orientals” (*The Pacific*, June 28, 1911), “The Asiatic Problem in the United States” (*Pacific Presbyterian*, July 20, 1911), “Our Missionary Responsibility in Foreign Lands” (*Pacific Presbyterian*, August 17, 1911), “Concentration, or Expansion, In Home Missionary Work?” (*The Pacific*, September 20, 1911), “An Interdenominational Council” (*The Pacific*, November 22, 1911), “Federation of Work among the Orientals

Needed" (*The Pacific*, December 1, 1911), "Cooperation in Work among Foreigners in San Francisco" (*The Pacific*, April 17, 1912), "Church Unity Sentiment and Movements" (*The Pacific*, May 8, 1912), "Neglected Fields for Work among Orientals" (*The Pacific*, May 8, 1912), "A Notable Utterance on Christian Unity: A Common Ground for Catholic and Protestant" (*The Pacific*, May 29, 1912), "Presbyterian Opportunity in the West-VII. Neglected Fields among Orientals" (*Pacific Presbytery*, June 13, 1912), "An Experiment in Cooperation" (*The Pacific*, June 26, 1912), "Important Cooperative Mission" (*Pacific Presbyterian*, July 4, 1912), "Book Notes" (*Pacific Presbyterian*, July 18, 1912), "The Green Street Work" (*The Pacific*, September 11, 1912), "The Congregational Club Meeting" (*The Pacific*, September 18, 1912), "A Congregational and a Methodist Church Federation" (*The Pacific*, February 19, 1913), "A Conference on Cooperation" (*The Pacific*, April 2, 1913), "An Important Step Toward Church Union" (*The Pacific*, April 16, 1913), "Progress in Church Federation" (*The Pacific*, April 16, 1913), "The United Protestant Church" (*The Pacific*, May 28, 1913), "United Brethren and Methodist Protestant Union" (*The Pacific*, May 28, 1913), "A Message to the Congregational Churches of the United States" (*The Pacific*, July 30, 1913), "The Outlook for a Larger Union" (*The Pacific*, October 15, 1913), "A Working Basis for Church Unity" (*The Pacific*, October 29, 1913), "A Survey of Progress in Church Unity" (*The Pacific*, November 19, 1913), "Who are the Ungodly Barriers to Christian Union?" (*The Pacific*, December 10, 1913), "More about Christian Union" (*The Pacific*, December 10, 1913), "Among the Orientals" (*The Pacific*, May 13, 1914), "Mission Work among the Japanese in California" (*The Pacific*, July 8, 1914), "The Japanese Church of Christ in San Francisco" (*The Pacific*, September 30, 1914), "Christian Co-operation among the Japanese" (*The Pacific*, December 9, 1914)

眞体密な活動をもつて、一九一一年の最初、公衆宣傳を主とするとして、日本基督教団が出来た。又公衆派は太平洋神学校 (Pacific Theological Sem-

inary, 現在 Pacific School of Religion) を無教派神学校にして諸教派に奉仕するよう整備したりして、教派協力の時代に積極的に対応しようとした。

そうした長老、会衆両派の教派協調への努力が顕著にみられる事業の一つが、東洋人に対する伝道事業であった。以下二教派の東洋人伝道に対する姿勢をみてみよう。

(一) 長老派

長老派が教派協調、合同による東洋人伝道を提唱するのは、今知り得る限りにおいて一九〇六年が最初である。長老派の日本人伝道部長であるE・スチュージ (E. A. Sturges) は会衆派に対して教派合同による伝道を申し入れると共に、サンフランシスコ長老派中会に対して一九〇六年六月一日、長老派外国伝道局が教派協調による日本人及び中国人伝道を望んでいるので協力して欲しいと訴えた。⁽⁶⁾ しかしサンフランシスコ中会のこの事柄に対する具体的な対応を示すものは『中会記録』に記されていない。

長老派が東洋人伝道において教派協調のために動き出すのは一九一一年以降である。長老派の外国伝道局は太平洋沿岸地域の東洋人伝道のための教派協調を実現するために、サンフランシスコで一九一一年四月二十五日に開かれた教派連合による会議(長老、パプテスト、クリスチャントリニティ、監督、フレンズ、メソジスト等)に出席した。⁽⁷⁾ 会議では従来の東洋人伝道のやり方の反省及び特に日本人伝道のための合同教会の必要性などが討議された。その結果として東洋人伝道をあらゆる方面から援助していく組織として、東洋人伝道者協会(Oriental Workers' Association)を設立することを決めた。六月五日に協会を発足するための準備委員会がもたらされた。

準備委員会の名称は太平洋沿岸の東洋人伝道に従事する米国人伝道者の常任委員会と名付けられた。その役割は端

的に、協力伝道を推進するための仲介機関として教派相互間の連絡をするものであった。具体的にはキリスト教出版物発行の促進、特別伝道集会及び伝道キャンペーンの準備、協力伝道の推進、東洋人伝道に従事する伝道者のための会議の開催など多岐にわたっていた。⁽⁸⁾

一九一一年の長老派総会では、外国伝道においては教派間の競合よりも協力を推進することを決めた⁽⁹⁾。このようだ、長老派において在米東洋人伝道を担っていた外国伝道局は積極的に教派協力による東洋人伝道を打ち出した。

（1）会衆派

会衆派が教派協調、合同による東洋人伝道のために最初に行動するのは、今知り得る限りにおいて一九〇六年である。前述したように、ストウジは会衆派に対して教派合同による伝道を申し入れてきた。これに対して会衆派は即答を避けて、代わりにこの問題についての会議をもつための代表委員を選出した (McLean, W. Pond)⁽¹⁰⁾。その後会衆派が教派合同問題についてどのような対応をしたのかは、あまりしない。

会衆派が教派協調による東洋人伝道を本格的に打ち出すのは一九一〇年以降である。カリフォルニアの東洋人伝道部 (California Oriental Mission) は会衆派の American Missionary Association (AMA) による一国内伝道組織の傘下にあった) 書記のポンドは同伝道部の一九〇九～一〇年度の年会で、東洋人伝道のために他教派との教派協力が必要なことを訴えていた⁽¹¹⁾。一九一一年度の同年会では、東洋人伝道のために諸教派が協力すべきことが決議された⁽¹²⁾。一方一九一一年度の太平洋沿岸議会 (Pacific Coast Congress) で、会衆派は太平洋沿岸の東洋人伝道の重要性を確認し、それを担っているAMAに対する一層の支援を行った。また教派協調を具体的に実現していくための委員

会を設置する等の決議をした⁽¹³⁾。それらの決議を踏まえて、一九一一年度の北カリフォルニア会衆派会議 (Northern California Congregational Conference) の年会では、教派連合のための委員会が教派協調を実現するためにはソジベト、長老、バプテリストに呼びかけ、一〇月十九日に会議をもつて、教派教会過密化の弊害を除去して教派の合同一致を実現するにむけて協議するところプランを報告した。又東洋人伝道に関しては、北カリフォルニア会衆派会議として東洋人伝道のための教派協力を支援する決議をした⁽¹⁴⁾。

このように会衆派において東洋人伝道を担っていたAMAの東洋人伝道部、及び北カリフォルニア教区は、じぞうで教派協力による東洋人伝道を支援した。

③ 教派協調による東洋人伝道

長老、会衆派がこれほどまでに教派協調による東洋人伝道を打ち出す論理は何であったのか。

ルードは *The Pacific 及び Pacific Presbyterian* の両方に掲載された AMA の G. ジュンマン (George W. Hinman) の、一九一一年一二月七日に関かれた国内伝道協議会主催による「軽視せられてきたハーラードに関する協議会」での報告を手がかりにしてみてみよう⁽¹⁵⁾。

ジュンマンは報告の中や、從来東洋人 (ヒンバー、中国人、日本人) に対する伝道が軽視せられてきたと述べる。最も深刻な問題は東洋人とハーラードが軽視され、あたどじりんじゆつも、その伝道方法やねむ。やなわち從来の伝道は東洋人伝道の必要性に直面しつゝも、それに対する十分な研究調査、協力体制、及び刻々変化していく伝道状況に対応してこれなかつた。

その上、諸教派の伝道者の注目を受けている点ではあるが、東洋人の教会組織を強化し自立化できない事、訓練や

れた東洋人伝道者を養成できない事、魅力的な伝道方法をとり得ない事等々な不充分点が從来の東洋人伝道の問題点として指摘できる。

その中でも最も深刻な問題は、東洋人伝道において教派間の伝道協力をしてこなかつたため、不可避的に諸教派間の競合という事態に陥つてしまつたことである。

今日東洋人伝道に従事する多くの伝道者達は、從来の伝道が未開拓分野を残してきたことに氣付いている。そしてこれらの分野は教派間の協力によってのみ取り組むことができるという事が今日増え明白になってきている。即ち教派協力による特別伝道キャンペーン、医療、教育、Y M C A 的伝道事業が中国人及び日本人によつて必要とされてい るというのである。

ここには東洋人伝道が教派競合の時代から教派協調の時代にはいつたという時代認識をもとにして、東洋人伝道と いう共通の目的のために諸教派が一致協力して組織的な伝道活動を行うことによつて、從来取り組み得なかつた東洋人伝道に關わる諸問題及びアメリカ・プロテスタントの教派主義の弊害にぶちあたつていこうという意気込みが感じられる。

長老、会衆両派によるこうした東洋人伝道における教派協力という構想はどのような形で実現したのであらうか。すでに東洋人伝道者協会をつくる構想に長老派が参加したことは述べた。ここでは長老、会衆両派が関わつた活動について述べたい。

一九一二年秋にA M A、米国聖書協会、長老派、メソジスト、その他の伝道局が協力して、クレアモントの元会衆派の中国宣教師ヘーガー(C. R. Hager)をアメリカ国内の中国人社会視察旅行に派遣した。その主な目的は、中国人伝道において諸教派合同の伝道事業を行うため及び中国人の宗教状況と伝道可能性を調査するためであつた。⁽¹⁶⁾

この企画は国内伝道協議会が「軽視されてきたフィールドに関する協議会」からの報告を受けて、東洋人伝道に從事する米国人伝道者の常任委員会に委託することによって実施されたものであり、委員会は教派協調による東洋人伝道事業のプランをつくることになっていた。⁽¹⁾ この企画は東洋人伝道のための教派協調という構想を実現していく一ステップとして重要な意義をもつていたといえよう。

以上みてきたように、長老、会衆両派は教派協力による東洋人伝道という構想を唱え、中国人伝道に関しては具体的な第一歩を歩み出していた。ではこれら二派は日本人伝道における教派協力についてどのような姿勢をとったのであらうか。この問題については次章でのべる。

II 一二教派と日本人クリスチヤンの「教派協調」的運動

(一) 基督教伝道団に対する

長老、会衆両派が教派協力による日本人伝道についてどのような姿勢をとったのかを検討するために、ここでは二つの事柄に対する長老、会衆両派の対応に焦点をあててみたい。まず日本人クリスチヤンの「教派協調」的組織である基督教伝道団に対する、次に桑港日本人基督教會設立に対するである。

長老派は、*Pacific Presbytery*（一九一一年七月一八）に宮崎小八郎の「カリフォルニアの日本人伝道事業」という論説の紹介をした。宮崎は「中で、一九一一年に設立された伝道団が日本人伝道事業の偏重性—限られた地域に集中的に行なわれ、本当に必要とされている地域に手が届いていない」と教役者が忙しすぎて自らの教区から出られな

いとじう事情のため組織されたこと、伝道団が農園やまた福音が伝えられていない諸地域への伝道において重要な働きをしたといふこと、伝道団が精神的にも実質的にも日本人伝道のための合同組織をつくる上で役立つことを述べる。

一九一四年度の長老派外国伝道局の年会報告では、もうとはつきりとした伝道団に対する評価がでてくる。⁽¹⁸⁾この報告によると、メソジスト、長老、会衆、クリスチヤン (Disciple) を中心にカリifornia の全てのプロテスタントの日本人教会及び伝道所の連合体を作らうという動きがある。この連合体は合同教会のようなものではなく、むしろ教会連合協議会のような構想である。こゝした諸教派の構想の中にはて伝道団は日本人の教派協調的伝道組織として、三教派（長老、会衆、メソジスト）からほどんど援助を受けていないのに広範囲に分散した日本人への伝道事業においてすばらしい働きをしてくる。そればかりか伝道団は諸教派の関係をより親密にし、前述した連合組織の設立に道を開いたと述べ、「教派協調」的組織としての伝道団の役割をプロテスタント教派の教派協調による日本人（東洋人）伝道の延長線上に高く評価した。

会衆派は伝道団に対してもうとよな評価をしたのだろうか。

The Pacific (一九一一・一一・一) では諸教派の協調、連合による伝道という思潮が国内外の伝道現場の中で高まりつつある今日、日本人及び中国人は教派合同においてアメリカにより進んでいる。日本人福音同盟（伝道団の誤まりか）、サンフランシスコの日本人Y.M.C.A及び『新天地』はそうした試みの一例である。キリスト教は元来東洋から西洋に來たものである。西洋のクリスチヤンはまだ東洋のキリスト教から何か学ぶべきではないのかとまで述べる。⁽¹⁹⁾

The Pacific (一九一四・七・八) には小林政助の「カリifornia の日本人伝道事業」という記事が掲載されてい

る。ここで小林は在米日本人を教化するためには諸教会が合同する以外にないことを強調する。その後日本人クリスチヤンによる「合同運動」を紹介し、小林は伝道団の伝道事業によつて太平洋沿岸の日本人の救いのためにキリストにあって一つにならうという氣運が高まつたこと、この伝道団こそは教派連合の中心であると述べる。⁽²⁰⁾

一方カリフォルニア東洋人伝道局の一九一二年度の年会報告では、ヒンマンが次のように報告する。従来はできなかつたが、今や他教派との協力によつて東洋人（ヒンズー、日本人、中国人）への伝道のためのプランもようやく現実性をおびてきた。こうした中にあって最も重要な教派協調運動の一つは伝道団の活動である。これまで顧みられなかつた地域で伝道したり既存の伝道事業をより強化していくために日本人の牧師や信徒がいかに大きなエネルギーを費し、伝道事業を展開してきたかまさに賞賛に値する。カリフォルニアの東洋人伝道に従事している諸教派の伝道局は、各々の組織からの代表者による共同監督という形をとつて日本人及び中国人への伝道を行うべきであると述べ、伝道団の活動を教派協調による東洋人伝道の一つのモデルとして高く評価した。

一九一三年度の北カリフォルニア会衆派教会年会（元カリフォルニア会衆派会議）は、ヒンマンがカリフォルニア東洋人伝道局は伝道団に対して援助したことを探じていて⁽²¹⁾。この中でヒンマンは伝道団が人種間の緊張を緩和し、又日本人伝道に関わる諸教派を究極的に組織的合同に導こうとしている点において高く評価している。

会衆派も長老派同様、教派協調による日本人（東洋人）伝道という構想の延長線上に、伝道団をその一つのモデルとして高い評価をした。

こうした長老、会衆両派の教派協調組織としての伝道団への高い評価は、一九一二年一〇月一六日にサンフランシスコで開かれた太平洋沿岸の東洋人伝道に従事する米国人伝道者の年会の決議に象徴的に表わされている⁽²²⁾。この決議は「新天地」に翻訳されて掲載されている。その決議は次のようであつた。

一、誠実に伝道団と協力して其事業を援助する事、

二、各派伝道局に各應分の補助金の支出を勧奨して、伝道団をして、地方に散在せる日本人の伝道を拡張せしむる事、
三、伝道団が伝道の結果、生ぜし決心者は、本人の選択によりて何れかの教会に属せしむる事、

この決議によつて明らかなように、カリフォルニアのプロテスタント教派で東洋人伝道に從事する代表的な教派は教派協調組織としての伝道団の活動を認め、東洋人伝道を教派協調で行うというモットーにのつとつて支援することを決定したのである。

(1) 桑港日本人基督教会設立に対する

桑港日本人基督教会は長老、会衆両派の合同教会として設立される以上、二教派が教派協調、合同による日本人伝道という点で一致して積極的に支援協力しない限り成し得ない事業である。それは単に二つの日本人教会が日本人伝道という共通の目的のために一つになるというだけではすまされない問題であった。

該教会設立に対する長老、会衆両派の姿勢の中にも、二派の教派協調による東洋人伝道を推進し、伝道団をそうち考えの延長線上に高く評価した基本的な態度がみられる。以下該教会設立に至る経緯を詳述するのではなく、専ら長老、会衆両派の教派としての対応にのみ焦点をあててみておきたい。

長老派からみてみよう。長老派外國伝道局は桑港日本人長老教会及び組合教会の教会合同実行委員会が「桑港日本人基督教会」という名称で合同教会を設立するための承認を一九一四年六月に求めてきたのに対し、次のような決議をした。⁽²⁵⁾

……我伝道局は……彼等が（日本人長老及組合教会代表者達—吉田）提議せし教会合同案を衷心より賛成し喜んで之を承認する

じんを生む。伝道局は「基督教日本人基督教會」で名稱を承認す、又前記兩教會が合して一の教會を組織せん為め取り来る今までの手続きを悉く承認す。合同完成の暁には更に最後の承認を経たる傳道局に報告すべし。同時に我傳道局は日本人同僚基督者が此の合同は米國及日本に於てのみならず、全世界を通じて實現せしめんとする我が傳道局の方針と一致するいとを確信せんことを望み、且つ我等は教會の大牧者の承認し給ふ所なきを信ず。

この決議からわからぬほど、長老派伝道局は教派協調、合同による世界のキリスト教化による伝道方針の延長線上にサンフランシスコの日本人合同教會の設立を承認したのである。

次に教會合同委員会は一九一四年八月二七日にサンフランシスコ中金に合同教會組織に関する要請を行つた。⁽²⁶⁾ 一九一四年八月三一日に植崎小八郎（基督教日本人長老教會牧師）がサンフランシスコ中金に対して日本人の一教會を完全な合同に導くため特別委員会の任命について求められた。⁽²⁷⁾ 中金は特別委員として W. K. Howe、ラーフン (Laughlin) 及びベトカジの任命並に共に次のよつた決議をした。⁽²⁸⁾

That the Presbytery of San Francisco most heartily endorse and approve the proposed union of our Presbyterian & Congregational [Japanese] churches and rejoice with them in this practical exhibition of the spirit of Christ and hope that this may spread till we have but one Japanese church of Christ throughout the state.

吾がキリスト教は日本人長老、組合（公衆派のルルード田）両教會の合同を承認するに共に、じつした教派合同による日本人基督教會が全米に漫透してほしいとを希望する事である。このよつた、中金は外國伝道局同様教派合同を実現して、一環として日本人合同教會の設立を評価したのである。

やは長老派は長じ組織を経て設立された基督教日本人基督教會をへん詮したのであらうか。新教派外國伝道局の

九一五年度の年会報告では、カリフォルニア日本人クリスチヤンの合同精神の成長はサンフランシスコの日本人長老及び組合教会の連合によつて具現された、該教会はその意図と目的においてまさに教派の組織的合同による教会であると述べる。⁽²⁹⁾

このように長老派は桑港日本人基督教会の設立を教派協調、合同による日本人伝道ひいては世界伝道の具体化の一環として高い評価をした。

次に会衆派の桑港日本人基督教会の設立に対する姿勢をみてみよう。残念ながらそれを知るための手がかりは少ない。教会合同実行委員が一九一四年六月にAMAに對して合同教会設立のための承認を求めたのに對して、AMAはヒンマン宛で合同承認の通知をしてきたという。⁽³⁰⁾ しかしその通知の内容は今紹介できない。

次に教会合同委員会は桑湾会衆派教会部会に対し合同教会組織に関する要望をした。そして桑湾教会部会は一九一四年九月八日に日本人合同教会の設立について協議した。⁽³¹⁾ その結果サンフランシスコの日本人長老及び組合教会の連合についてサンフランシスコ長老派中会と協議する委員としてヒンマン、ナッシュ(C.S.Nash)、ボンドを任命すると共に、次のような通知をヒンマンに出した。⁽³²⁾

……願くば此の部会の為めに桑港日本人合同教会の委員諸君に向つてエ、エム、エ(A·M·A—吉田)は北加組合教会年会にして承認せば、合同教会の提案を誠実に是認する旨御伝達被成下間敷哉。尚更に此の美はしき計画を實現せんとする、兄弟等に祝意を述べ、且つその成功を祈り深厚なる敬意を表せられんことを希ひ申候……

即ち桑湾会衆派教会部会は日本人合同教会設立を支持承認したのである。

最後に会衆派が設立された桑港日本人基督教会をどう評価したのかみてみよう。

北カリフォルニア会衆派教会年会の一九一四年度の教会連合に関する委員会の報告では、諸教派の協調、合同は停

滞状況にあると報ずる。特にカリフォルニアはかなり遅れている。そうした中において、サンフランシスコの日本人教会—長老、組合一の合同は銘記すべきであると述べる。⁽³⁴⁾

このように会衆派も長老派同様、桑港日本人基督教會の設立を教派協調、合同の実現という流れの中で、その一成果として高く評価した。

む　す　び

長老、会衆両派の合同教会として設立された桑港日本人基督教會は当時のカリフォルニア・プロテスタント諸教派、特に長老、会衆両派のアメリカ国内だけでなく世界的に広がった教派協調、合同運動の流れに対する対応、とりわけ東洋人伝道に対するそれという背景なしには考えられないものであった。

一九一〇年代前半のカリフォルニアの長老、会衆両派は教派協調、合同という時代の流れの中にあって、特に在米東洋人伝道のための教派協調、合同を提唱し、それを実現すべく教派協調による実行委員会を発足させて具体的なプランをねつた。

長老、会衆両派は教派協調による東洋人伝道という方針にのって、一九一〇年代初頭より活発な動きをしていた日本人クリスチヤンの「教派協調」的組織—伝道団—をそうした教派協調を具体化した一モデルとして高く評価した。

こうした長老、会衆両派の東洋人伝道、日本人伝道に対する基本的な姿勢—教派協調、合同—が日本人長老、組合両教会の合同を実現するため有利な状況をつくれた。結果的には、二派はこぞって桑港日本人基督教會の設立を支えた。

機、承認した。

次の課題は、いわつた長老、衆衆両教派の教派合同に対する基本姿勢を踏まえた上で、教派合同がどれほど母教派の財源問題とかひんやふるのか、日本人クリスチヤンが教会合同を成し得る主体としていかがで母教派にインペクトを与えたのか、ベトナム、ボンビ及びランタンが合同教会設立のためにどの程度の影響力をもったのか、そして設立された合同教会ははたして教派合同の教派へ向うの実体をもつたのかどうかなどである。これらについては別稿で論じた。

本稿の筆者はたゞ一端の方々、図書館の協力を得た。原へ翻意を載せた。

Mr. Oscar Burdick, Graduate Theological Union Library, Pacific School of Religion Library, San Francisco Theological Seminary Library, The Amistad Research Center (Tulane Univ.), Christ United Presbyterian Church (San Francisco), The Japanese American Research Project Collection (U. C. L. A.), East Asiatic Library (U. C. Berkeley).

註

(一) 日本人クリスチヤンの団体史より引いた記録「日本基督教」、「日本基督教」及び坂口彌次「基督教と太平洋沿岸日本人キリスト教団体」参照。海長崎団體の「日本基督教」(基督教と太平洋の生涯) (叢書館) 1927年(昭和2年) 及ある。

(二) Cavert, Samuel McCrea, *The American Churches in the Ecumenical Movement 1900—1968* (N. Y.: Association Press, 1968) 参照。

(三) “Cooperation in Work among Foreigners in San Francisco” (*The Pacific*, April 7, 1912), “The Green Street Work” (*The Pacific*, September 11, 1912), “The Congregational Club Meeting” (*The Pacific*, September 18, 1912), Northern California Congregational Conference, *Minutes* (1912).

(四) Northern California Congregational Conference, *Minutes* (1912).

(五) W. Pond, Report in California Oriental Mission (June 4, 1906).

- (∞) San Francisco Presbytery, *Minutes*. (June 18, 1906).
- (\sim) "The Asiatic Problem in the United States" (*Pacific Presbyterian*, July 20, 1911).
- (∞) ibid.
- (∞) "Our Missionary Responsibility in Foreign Lands" (*Pacific Presbyterian*, July 20, 1911).
- (∞) W. Pond, Report in California Oriental Mission (June 4, 1906).
- (∞) California Oriental Mission (AMA), *Annual Report* (1909—1910).
- (∞) California Oriental Mission (AMA), *Annual Report* (1911).
- (∞) "Resolutions Passed at Pacific Coast Congress Relating to the Work among the Orientals" (*The Pacific*, June 28, 1911).
- (∞) Northern California Congregational Conference, *Minutes* (1912).
- (∞) "Presbyterian Opportunity in the West-VII. Neglected Fields among Orientals" (*Pacific Presbyterian*, June 13, 1912), "Neglected Fields for Work among Orientals" (*The Pacific*, May 8, 1912).
- (∞) "Important Cooperative Mission" (*Pacific Presbyterian*, July 4, 1912), "An Experiment in Cooperation" (*The Pacific*, June 26, 1912).
- (∞) Northern California Congregational Conference, *Minutes* (1912), California Oriental Mission (AMA), *Annual Report* (1912).
- (∞) Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church, *Annual Report* (1914).
- (∞) "Federation of Work among the Orientals Needed" (*The Pacific*, December 1, 1911).
- (∞) "Mission Work among the Japanese in California" (*The Pacific*, July 8, 1914).
- (∞) California Oriental Mission (AMA), *Annual Report* (1912).
- (∞) Congregational Church of Northern California, *Minutes* (1913).
- (∞) "Resolution Adopted November 12th, 1912, By The American Workers For Orientals On The Pacific Coast" in *New Evangelical Movement Among The Japanese On The Pacific Coast* by Masasuke Kobayashi (October 1, 1912).

- (24) 「近頃の新現象」(『新天地』1丸11・111・1)°
「米国人基督教の組織圖」(『近頃』1丸1回・1〇)°
回。
- (25) San Francisco Presbytery, *Minutes* (August 31, 1914).
- (26) ibid.
- (27) Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church, *Annual Report* (1915).
- (28) Bay Association of Congregational Church, *Minutes* (September 8, 1914).
- (29) 「近頃」(論壇)°
回。
- (30) Bay Association of Congregational Church, *Minutes* (1914).
- (31) 「近頃」(論壇)°
回。
- (32) Congregational Church of Northern California, *Minutes* (1914).
(33) (46) 24. 8. 1. Graduate Theological Union, Berkeley)